「あきらめない」という生き方

――山梨県南巨摩郡早川町茂倉の総人足の試みをめぐって――

小島孝夫

はじめに

日本において家業の継承が必然のものでなくなったのは昭和二二（一九四七）年の日本国憲法の施行に伴い、明治三一（一八九八）年に施行された明治民法が全面改正され、戸主及び家督相続制度が廃止された以降であるが、それが実効的に実践されるようになったのは、施行前後に婚姻した世代の次世代以降である。そして、次世代は高度経済成長期を経験する過程で、自由な職業選択を前提とした新しい家族観を共有していくことになった。同時に、家業として食料等の生産活動を担ってきた農山漁村は都市部で生産される商品の大消費地となり、昭和三〇年代に現出した高度経済成長期の基点となったといえよう。

また、家の継承や家業の継承が前提ではなくなった現代社会においては、複数世代が同一家屋に居住することは稀となり、各世代が目的に応じて居住地を選択し、当該居住者の居住目的が達成されると当該家屋は空き家となっていくことが、各地でみられるようになった。こうした傾向は山間地などを対象に「過疎」・「限界集落」などと評価され、社会的な注目を集めてきたが、人口が集住している都市部においても同様な傾向がみられる。人の移動が流動的な都市部では、むしろ、こうした状況が看過されているともいえる。

本稿で事例とする山梨県南巨摩郡早川町茂倉地区[1]も同様の展開を経験した集落で、かつては六〇余戸の集落であったが、現在では高齢の居住者のみが住む一五戸の集落となっている。この集落の日常生活はこの居住者だけで維持されているわけではない。高度経済成長期に転出し二地域居住者となった転出者との協働によって維持されているのである。そして、年周期で行われている協働作業の核となっているのが、春季と冬季とに行われる総人足である。とくに冬季に行われる総人足は「水道人足」とも呼ばれており、空き家となっている家屋を含めた地域内の水道管網が凍結しないように、沢から給水している水道管の増設作業を協働で行うというものである。

こうした協働作業が継続できる背景には、茂倉地区内で平成一〇年度まで継続されていた若者（ワケイシュ）の存在がある。現在の総人足の主たる参加者は転出者を含めて、各家の長男が多くを占めている。これらの人びとの多くは若者内で行われた選挙で「頭」に選出された経験を有している。そのことにより、彼らにはそれぞれの家を代表しているという意識が共有されており、各家が数世代に亘って地域内で培ってきた「信用」という家産を継承していくことが念頭に置かれている。この「信用」を現在までつないでいるのが、それぞれが若者が担ってきた諸行事の経験をとおして同世代の仲間から得た「信頼」である。若者は地域内の祭典を担うことになったが、その過程をとおして頭は当該集団を統括する何でもできる人の意のマンノウガンという評価を得ていくことになった。こうした経験を共有してきた人たちの「信頼」が累積されることにより、家産としての「信用」が形成され、茂倉の日常生活を維持するための協働作業が続けられているのである。

本稿では、客観的には消滅に向かいつつあると評価されがちな集落規模で暮らす人びとが、山間地において日常生活を維持していくために実践してきた地域社会維持の試みを検討していくことにする。

一、山梨県南巨摩郡早川町茂倉の暮らしの成り立ち

（一）茂倉という集落

早川町茂倉は山梨県西南部、日本三大急流の一つとして知られる富士川の支流早川の上流標高九〇〇メートルに位置する山間集落である。歴史的には、富士川水運の拠点の一つである鰍沢河岸（現、南巨摩郡富士川町）と早川入と総称された早川流域の諸集落との間を結ぶ峠越えの道に面して形成された集落である。

かつての茂倉集落での暮らしは、炭焼き、養蚕、林業、焼畑、畑仕事などで支えられていた。職人として働く者も多くいたようで、木材加工職人や、茅葺き職人、大工などがいた。なかでも林業は、昭和三九年に木材輸入

の全面自由化が始まるまで、飯場ができるほど盛んに行われていた。

昭和二〇年代頃までは焼畑や畑作を主体とした生産活動が行われてきた。茂倉鉱山の採掘が盛業であった頃は、鉱夫としての仕事もあった。明治三九（一九〇六）年に鉱脈が発見されると、金・銀・銅へと順次鉱脈を探しながら採掘を行い、これらの鉱脈が絶えると石灰岩採掘へと採取対象を変えながら採掘が続けられた。昭和三〇年代前半に最盛期を迎えたという。最盛期には集落外からの出稼ぎ労働者も加わり、茂倉の人口は四二〇人を越え、戸数も六五戸にまで増えたという。太平洋戦争中は茂倉鉱山労働者は陸軍入隊と同等に扱われたため、茂倉住民の半分以上の人たちが鉱山での仕事に従事したという。

図1　山梨県南巨摩郡早川町茂倉の位置

昭和四〇年代に入ると、輸入鉱石の割合が増加し、茂倉鉱山の採掘量が減少したことにより、昭和四三（一九六八）年には閉山した［早川町誌編纂委員会　一九八〇：四八〇］。このことが契機となり、新たな仕事を求めて茂倉集落から新たな生活拠点に転出していく人たちが急増していくことになった。

また、太平洋戦争中から昭和三〇年代にかけては、用材としての針葉樹の需要が高まった時期で、檜を売って得た現金で、甲府盆地内に水田用地を購入する者が多く現れ、水田耕作をすすめながら購入した土地に作業小屋を建てることで、生活拠点を新たに購入した土地に移していく者が増え始めた。昭和二五年頃には、約二〇世帯

写真1　茂倉集落全景

が山林の樹木を売却して山梨県昭和町や甲府市などに水田用地を購入[2]し、水田周辺に作業小屋を建てて水稲栽培を行うようになった。これらの作業小屋はやがて仮住まいができるように改築され、茂倉で義務教育を終えた子どもたちが甲府市周辺の高校に通うための住まいとなっていった。昭和四〇年の甲府工業高校三里分校の閉校と昭和四三年の茂倉鉱山の閉山により、中学卒業者の転出がさらに顕著になっていた。一九七〇年以後、転出した世帯は四四世帯である。現在の茂倉の集落は杉林に囲まれているが、この杉の植林は転出時にそれまで麦畑として利用していた緩傾斜地に植林したものである。将来の資産となることを期待して植林されたが、充分な手入れがされないまま現在にいたっている。

現在の茂倉の戸数（ブラクジュウ）は六四戸であるが、ホンムラの居住者（ウチッキリ）は一五軒となっている。このような背景を有する現在の茂倉の人びとの暮らし方は、集落での滞在形態により、「居住型」「移動（往復）型」「転出型」に大別することができる。

（二）交通網の変化と茂倉集落

トロッコや県道の整備が進む以前は、早川町の各集落を結ぶ交通路は峠道であった［及川　二〇〇七：一六―四三］。茂倉集落は十谷峠を越えて鰍沢に至るオウカンと呼ばれた峠道にあり、人と物が頻繁に往来していた。寛正元（一四六〇）年に、鰍沢から鬼島、島屋を経て十谷峠を通り茂倉に米を運んだという記録があり、その歴史は長い［早川町誌編纂委員会　一九八〇：一三三八］。十谷峠越えの往来は盛んで、炭焼きで生産された炭は十谷峠にあったという問屋へ、養蚕でできた生糸は十谷峠を越えて鰍沢まで、売りに行ったという。

また、富士川舟運で運ばれてきた墓石なども峠越えで早川入の集落まで運ばれていったという。十谷峠越えの交通路では、茂倉は甲府や富士宮に最も近い位置に立地した集落だったのである。大正一三（一九二四）年から昭和八（一九三三）年にかけて、早川入にトロッコの通る道が敷設されると、多くの人が早川入奥部まで移動できるようになると同時に、それまで利用されていた峠道は徐々に使われなくなった。その後、トロッコの通っていた道は県道として整備され、早川町新倉で東京電力による水力発電事業が開始されると早川沿いの県道が幹線道路となり、十谷峠越えの道は、その後林道として整備されていくことになった。それまで峠道沿いの集落として物資の流通に関わってきた茂倉集落の生産活動は、集落を基点とした生産活動へと変化していくことになった。

（三）茂倉集落の日常生活

現在の居住者の多くは、茂倉鉱山や集落外の職場での就労経験があるため、厚生年金が支給されており、その資金で生計を維持している。生活必需品は、身延町にあるスーパーマーケット「セルバ」で購入する人が多い。「セルバ」までは集落から車で一時間ほどかかるため、車を持っていない住民は、持っている住民が買い物に行く際に同乗させてもらうことや、集落から四キロほど離れたバス停まで歩き、バスを利用するなどの対応を取ってい

る。住民票を集落に置く一五世帯のうち、車を持ち、運転できる世帯は八世帯である。

集落にある畑や、集落から五キロほど下った中洲[3]にある畑や転出先の畑などで栽培したものを日々の食料に充てている居住者も多い。ほとんどの居住者と、集落に訪れる頻度の多い移動（往復）型の転出者は、各家の周辺で畑作を行っており、一部を町内の売店や宿泊施設で販売しているが、多くが自家用や住民間での交換用に充てられるという。車で買い物に行けない人たちは、スーパーで購入するより割高にはなるが、毎週木曜日に来る移動販売車で、米や魚肉類などを購入している。集落で暮らしていくうえでの心配事は病院が遠い[4]ということである。最寄りの病院は身延町にあるため、バスや車に便乗させてもらいながら通院している。

居住者は、「集落全体が親戚のような関係である」と考えており、日常生活のあらゆる面において、強い関係性を有する生活をしている。食事やおかずを作るときは自分の家の分だけを作るのではなく、お互いに分け合ったり、住民同士が日常的に見回りをしながら安否確認のようなことをしているという。居住者が少なくなった現在でも、住民間の関係性を表すモグラコンジョウ[5]という意識は残っているのだという。高齢化がすすむなかで、集落内は坂が多いため、いつまでここで生活できるかは分からないと考え始めている人たちもいる。茂倉集落での生活については、茂倉にはマンノウガンという言葉があり、自分で日常生活を維持するためのことはできるようにならなければならないとされている。そのことにより、日常生活では自分一人でも大方のことはできてしまうようになるので苦労はないという。

一方、転出者の多くは、生活拠点を他地域に置いているため、日常生活で集落の人々と関わりがあることは少ない。集落に訪れる頻度は人それぞれであるが、夫妻ともに集落出身である場合は往来の頻度が高い。また、茂倉区の役員に選出されると、総人足や総人足前に行われる役員会をはじめ、任意参加である草刈りや行事にも集落に訪れることが多くなるという。集落を往来する転出者は長男であることが多いが、彼らの配偶者の動向は村内婚の場合と村外婚とで大きく異なる。村外婚の場合、配偶者が集落の人足行事に参加することはほぼ皆無である。

（四）茂倉集落の協働作業

茂倉集落は、早川町のほかの集落と比較しても年中行事が多い集落であったという。人口減少の影響で、現在はその中のいくつかが休止となってはいるが、続いている祭礼や慣行もあり[6]、その際には転出者も含め集落に人が集まる。祭礼の運営は若者から保存会に引継がれ、現在は区に引き継がれているが、それらに所属していた人たちが祭礼に参加することが多いのだという。特に、若者頭を務めた人が多く参加する傾向にある。一方で、仕事の都合や他地域の生活拠点での役員などの用務のため、祭礼に参加する人々は減少している。これに対応する形で、近年では祭礼と人足とを同日開催することで、転出者が集まりやすくする工夫が行われている。

現在の茂倉集落の日常生活は、総人足という協働作業によって維持されている。総人足に参加できない場合、一回につき三〇〇〇円の「不参料」を支払う必要がある。茂倉の「不参料」制度は、記録によると、昭和五五（一九八〇）年から開始された。集落では、昭和四三年に茂倉鉱山が閉山したことで、集落に住んでいた半分以上の住民が転出し、人口減少が進んだうえに、昭和四四年には三里小学校茂倉分校が閉校、次いで昭和四七年には茂倉保育所も閉園となった。この状況下で、それまでも行われていた総人足の参加人数の減少を抑えるために、「不参料」制度が始まったと推測できる。制度開始当時、不参料は一五〇〇円であったが、昭和五八年には二〇〇〇円、昭和五九年には三〇〇〇円と値上げし、現在に至っている。総人足は一年に二回行われるため、二回とも不参加となると、六〇〇〇円を支払わなければならない。茂倉区として各家から毎年徴収している、区費四〇〇〇円や水道管理費五〇〇〇円などの費用と比較しても高額であり、集落において総人足が重要な行事であることがうかがえる。

三年前から総人足で行ううえで重要な作業のひとつであった新倉と茂倉との間を結ぶ町道の清掃整備作業の一部を町に依頼するようになり、以前より総人足を行う必要性は少なくなったと住民はいう。総人足の継続につい

写真2　総人足作業参加者の確認作業

ては議論もされてきた。平成二八年に区が四〇人の住民を対象にアンケート調査[7]を行った際には、三二人の回答者のうち、二四人が二回とも町に作業を委託した方がよいとしながらも、総会の場で「やっぱりやった方がいい」という声があがり、現在まで続いている。

総人足のほかに、毎年七月中旬に行われる草刈り人足も共同作業として集落では行われている。近年では、夏祭と同日開催にして、多くの人に集まってもらうようにしているという。令和元年は七月二一日に行われ、二〇人が参加した。日程は、町道の雑草刈りや道路の落石除去などを行った後、昼食として公民館で集落の女性が作った料理を食べるというものであった。草刈り人足は不参料を徴収せず任意の参加となるため、総人足に比べると参加する人数は減るが、他地域に生活拠点を置く人の中にも、ほぼ毎回参加する人も複数いるという。

このほかにも、集落の生活で問題が起こった際には、居住者のみでなく、対応できる転出者も集落に集まり、協働作業を行い対処することもある。平成三〇年の一〇月二四日に、集落内の水道管が壊れ、漏水した際には、区長の「動ける者は出てこい」という呼びかけにより、普段は集落外

に生活拠点を置く住民も含め六人が集まり、埋設されている水道管の修理を自分たちで行ったのだという。また、二〇一四年二月一四日未明からの豪雪では早川町全戸が孤立状態になり、茂倉集落も軒先まで埋まる積雪となったが、居住者たちが互いに安否確認を行い、それぞれの備蓄食糧等を分け合い一週間を過ごしたという。災害派遣で到着した自衛隊員に対して餅をついて待っていたという。

二、茂倉の集落組織

（一）マキ・シンルイマキ

茂倉集落では隣接する家同士の関係のことをジルイと呼ぶが、茂倉集落の最も基層的な社会組織は、同族集団であるマキである。マキは分家などにより戸数が増加すると、さらに階層的にシンルイマキを構成した。マキは互助集団でもあり、焼畑や麦栽培などの畑仕事はマキやシンルイマキを単位としてユイシゴトを行っていた。小規模なマキは複数が連合してユイシゴトを行った。葬儀に際しても、葬儀の準備をマキもしくはシンルイマキが手伝った。シンルイマキやマキは、生まれてから死ぬまで面倒を見たり、見られたりする関係で、葬儀以外にも、マキごとに祀っている先祖の祭祀や、結婚式などの冠婚葬祭をマキやシンルイマキを単位に行ってきた。茂倉集落では葬儀の際の座順を、村の住民のムラザシキと村外から参列した人たちのタビザシキに分けていたが、ムラザシキの中でも、シンルイマキやマキは喪主の家族と最も近い座順になったという。また、シンルイマキで結婚する者がいると、マキの仲間から耕作用の畑が譲渡されることもあった。こうしたマキ内での耕作地の譲渡は、マキ内での耕作地の総量は維持されることになり、理に適った互助方法であった。マキに限らず、茂倉集落では互助的な関係が多いほど生活が安定するとされており、マキやシンルイマキの関係は、茂倉での生活ではなくてはならない存在だった。

一方、現在ではマキやシンルイマキの関係は大きく変化している。集落内で集約的な農作業や冠婚葬祭が行わなくなったことに加え、それまで一般的だった村内婚が減少し村外婚が増加したことで、マキとしての活動の機会が減少し、その役割も希薄化した。マキによっては、全構成員が村外に転出したため、転出先の日常生活ではマキに頼る関係は必要となくなっていった。こうした状況に対して、茂倉内では「現在は住民全員が大きなマキのようなもの」とか、「具体的な協働作業がなくなっても、相談相手としての関係を続けていければいい」というマキの存在を前提とした評価が聞かれるが、マキに対する評価は、住民間でも世代差により異なってきている。

(二) 組

次いで、集落内で最も実践的な役割を担っているのが組である。組とは、集落内の居住空間を分割して組織された集団である。沖組、中組、下中組、下組の四つの組がある。各組にはマキやシンルイマキとなる家々が含まれる場合が多いが、マキやシンルイマキよりも公的な役割を担っている。山の神を祀る行事や回覧板は組単位で管理している。かつては、一部の組では集落の付近を流れる茂倉川の維持・運営という名目で各家から集金して貯蓄し、経済的に支え合う仕組みも作られていたという。麦の脱穀を水車で行っていた頃は、組単位で水車を使用する順番が割り振られていた。自動車通行に対応するため昭和二八（一九五三）年から三五年にかけて行われた新倉―茂倉間の町道拡幅工事も、住民が組ごとに区間を分担して工事が行われた。

組の役割も現在では大きく変化してきている。麦の耕作は皆無となり、日常的に組単位で行う用務もなくなっている。回覧板は集落を上・下の二つに分けて回すようになった。それでも、転出している人たちが加わる総人足の際には、作業の分担単位や参加者の確認や集金の単位として機能している。

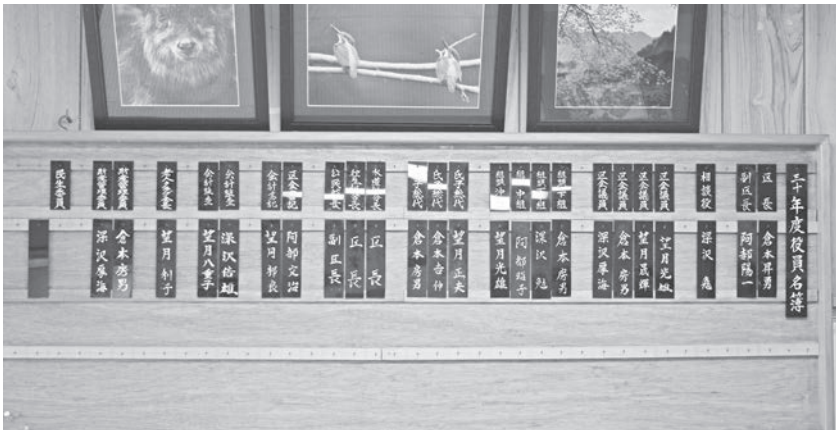

写真3　茂倉地区　平成30年度役員名簿（茂倉公民館）

（三）役職

茂倉では、区費を納入したものが区民とみなされている。茂倉区には次のような二〇の役職があるが、現在では区長らが兼務することで運営されている。これらの役職には、転出者も就くことになっており、転出者も区民としての責任を負うことが前提となっている。区長はホンムラ在住者で夫婦健在のものが互選で選出される慣わしである。そのために、現在までの区長は三巡目・四巡目の担当となっている。

区長、副区長、代理者、相談役、区会議員（四）、組頭（下組・下中組・中組・沖組）、財産管理委員（区長・副組長が兼務）、氏子総代（三）、相談役（祭頭）、水道組合長（区長）、衛生組合長（区長）、民生委員、公民館長（副区長）、育成会長（区長）、消防部長（代理者）、婦人部長、老人クラブ会長、森林組合理事、区会書記（民生委員）、特会書記

茂倉では役職に就いていなくても、各世帯は区の一員として毎年四月二九日に行われる総人足と区総会、一二月の第一週に行われる総人足および区役員選挙には参加しなくてはならない。総人足に参加しない世帯は、一回につき三〇〇〇円の不参料の納入、

区総会に参加できない世帯は委任状の提出が求められている。

（四）若者（ワカモノ）・若衆（ワケイシュ）

茂倉では昭和二五（一九五〇）年から若者（ワカモノ）・若衆（ワケイシュ）と呼ばれた若者組が再編された。[8] 若者は中学を卒業した者から二五歳までの男子によって組織された集団で、小学校高学年から中学生までの小若衆（コワケイシュ）の指導と祭礼の運営を行っていた。若者の中で二五歳の長男の男性が選挙により選ばれ、一年間、若者のカシラ（頭）を務めた。

若者の引継ぎは成人式後に行われるのが通例で、一月末に行われるヤナギタオシの作業からが次の若者の担当となった。茂倉集落で行われていたほぼ全ての祭の準備と運営を行ったが、昭和四〇年代頃から、進学や就職のために集落外で生活をする者が増加するようになり、集落で生活する若者の人数が減少していくことになった。行事の度に戻ってきて若者の務めを果たしていたが、若者の対象となる世代の人員不足が進行した。対象年齢の上限を二五歳から三〇歳に引き上げるなどの対応が試みられたが、平成一〇（一九九八）年を最後に、若者の活動は休止された。その後、若者に代わる組織として、かつて若者に所属していた任意の人たちにより保存会が結成され、平成一一年から平成一七年まで活動したが、保存会の人たちの高齢化が進み負担が増したため、平成一八年から、祭礼等の準備や運営は茂倉区に引き継がれ、氏子総代や区長が行事の準備や運営を担当している。

（五）婚姻

これらの社会集団以外にも、茂倉には各家の関係を強固にする社会的な関係が存在した。

茂倉では昭和四〇年代まで村内婚が行われていた。茂倉地区から西山地区などへの婚出は多かったが、茂倉地区への婚入は少かったという。女性が嫁いだり次・三男が婿入りすることで、マキやシンルイマキを越えて集落

写真4　名付けの紙札

内の家どうしの関係性を強固にする方法であった。異なるマキ間で婚姻関係を築くことで、生家と婚家との間で新たな交流が生まれることになった。進学や就職のために集落の外で生活する者が多くなると村外婚が一般的になっていった。そのため、村内婚の頃のような集落内の家と家とをつなぐという役割は現在の茂倉の婚姻からは消えていくことになった。また、村外から配偶者を得ることが一般化した現在では、転出者が夫婦や家族単位で茂倉の生家を訪れることは少なくなりつつある。中学校卒業まで茂倉で過ごした人たちが茂倉と転出先とを往来しているというのが現状なのである。

（六）名付け

さらに、集落内の任意の家との関係を強固にする方法には名付け親の慣行があり、集落内で子供が誕生した際に名付け親を頼むことで親分・子分関係が結ばれた。名付け親が親分、名付けられた子供とその家族が子分になり、子供が小学校へ入学するなどの祝いごとの際には、子供とその家族から名付け親へ挨拶が行われた。名付け親の慣行は、マキやシンルイマキと異なり、同族以外の任意の家との関係を強固にすることを目的としている。集落内で婚姻等によって形成された親

写真5　ブッキリ・ブッカケ（西方寺）

戚関係が数世代空くことなどで、希薄になってきたと感じる家との関係を再び強固なものにするための最も簡便な方法である。同族ではない集落内の家や人との関係を継続するために、相互に名付け親になることで、親分・子分の関係を結ぶことが多かったという。擬制的な親子関係により親戚になるのだという。茂倉集落では、先天的なマキやシンルイマキという同族による家連合に加えて、婚姻や名付け親慣行などによる後天的な家連合を重層的に作り上げてきたのである。後者は、社会や時代の推移に応じた戦略的な方法であったが、現在では集落内で子供が誕生することがないため、この親分・子分の関係は形骸化したものになっている。

（七）寺と檀家

茂倉には二つの寺院がある。シタンテラ（下の寺）と呼ばれる曹洞宗西方寺と、ウエンテラ（上の寺）と呼ばれる日蓮宗妙蓮寺である。それぞれの住職は現在では兼務となっているが、茂倉の人たちにとってはなじみのある家が世襲的に住職となってきた。それぞれの寺院では正月に総会と新年の家内安全等のご祈禱が

写真6　水行（妙蓮寺）

行われている。西方寺ではブッカケ（仏掛）とブッキリ（仏切）、妙蓮寺では住職の水行が行われ、その後に参集者全員に対してお祓いが行われる。

西方寺は八王子市在住の住職が高齢となったため、数年前から住職交代の模索が行われており、二〇二〇年の四月二五日をもって新たな住職と交代することになった。二日間にわたって行われていた、ブッカケ・ブッキリを一回で行うなどの調整なども行われたが、住職交代の模索が行われている間に家をたたみ墓地を移動する離壇がすすみ始めている。妙蓮寺の場合は茂倉と縁の深い身延町善行寺のお上人が兼務しており、日蓮宗身延山本山が卑近な存在であることも加わり、安定した寺檀関係が維持されている。妙蓮寺で行われる水行には集落のほぼ全戸の人びとが集まってくる。[9]

三、茂倉の総人足の背景

（一）総人足に集う人びと

茂倉では、居住者と他出者によって、日常生活の維持を図るための工夫が行われているが、現在の「茂倉

区民」を構成している世代は、若者組を経験した世代である。一九七九年以後に茂倉地区内で生まれた子どもはなく、この最後の子どもが若者頭を終えるまで、若者組は続けられたが、他の若者の構成員はすべて年長者が参加して行われることになった。若者解散後は、転出した次男・三男などを中心に「茂倉保存会」が結成され、祭礼などの年中行事の継承が図られた。

この背景にはどのような事由があるのであろうか。現在、茂倉の集落維持が可能になっているのは、転出者の理解と協力があってのことであるが、その背景として次の事由が考えられる。まず、若者での経験をとおして茂倉での暮らしについて共通した地域像を有していること、次に、転出した者たちが恒常的な情報交換の場を持とうとしたことが挙げられる。茂倉において共通した経験を有する者たちは、転出後も無尽という会合を行い、定期的な懇親や情報交換の場を設けており、そのことが茂倉を離れた後の転出者間の意識の紐帯となってきた。加えて、区費を納入している転出者が「茂倉区民」として総会において自由に意見が述べられることにより、二地域居住者側が直面している状況などについて説明する機会が持てることで、ホンムラの維持のためにそれぞれが果たせる限界について理解を求められる機会にもなっている。また、総会は全区民により協議が行われる場であり、居住者からの要望等も表明できる場ともなっている。

（二）若者頭という経験

人足作業が現在まで続いている背景には、各家の責任を果たすという意味合いが強いが、この作業に参画している人びとの言動の参与観察を続けていると、この作業に参加すること、作業を続けることへの強い意識の存在に気づく。ある種の自負といったものである。無尽等により茂倉から転出している人びとの間には、今なお強い連帯意識が存在している。さらに、その背景には「いつも○○をしてきた家（人）だ」とか「いつも○○をしてくれた家（人）だ」という評価が相互で共有されており、互いの家（人）に対する「信用」となっている。

各家には不動産を主体とした家産が存在するが、こうした「信用」も家産となっているのである。そして、「信用」という家産が集団全体で共有されていることで、個々人はそれぞれの家の「信用」という家産を守っていくための自負や自戒としての具体的な行為として、総人足に参画するということが継承されているのである。

そして、その「信用」を継承することの紐帯となっているのが、歴代の若者頭を務め、家長となった長男たちの存在である。昭和二五年から始まった茂倉の若者制度は毎年、新頭を若者構成員間での選挙で選出しており、信任が前提となっている。頭として信任されるということは、当人個人に対する信任であると同時に、当人の属する家に対する信任でもあった。さらに言えば、歴代の家長が築いてきた信頼の蓄積が各家の信用となっているのである。

茂倉で成長する過程でこうした経験をした長男たちによって、現在まで茂倉の総人足は継続されてきているのである。家を代表して若者頭を務め、地域内の諸活動に参画してきたという自負が各自にあり、その経験で習得した知識や技能を有する男たちが総人足においては年齢階梯的に連なった集団を形成して諸作業にあたることになるのである。

(三) 同じ地域社会像を共有するということ

小若衆を経験して高校進学に合わせて転出した人たちが連携を保っていくために機能していたのが無尽である。定期的な情報交換と懇親を図る機会であった無尽は、成人後には酒席の機会ともなり、積み立て金による旅行無尽へと展開していくことになった。また、茂倉から転出後の同郷の異性との連絡の機会にもなって、転出後に同郷者と結ばれるということにもなった。転出後の無尽の機会は、若者としての紐帯を強固にしていくと同時に、茂倉という地域社会像を共有していくことにもなっていった。

茂倉の日常生活は前述した総人足によって支えられている。とくに十二月第一日曜日を目途に実施される総人

写真7　オクヤマでの増設パイプ設置作業

足は「水道人足」とも呼ばれるもので、茂倉に居住している人たちにとっても、茂倉に空き家を残したままにしている人たちにとっても、最も重要な協働作業である。水道人足とは冬季の渇水に備えて、オクヤマと呼ばれている沢の取水地から引いた水を町営水道の貯水タンクに送水する増設パイプを設置する作業である。沢からの水を補給することにより、空き家を含めた全戸の水道の蛇口を開放することが可能になり、標高九〇〇メートルの茂倉集落全域の水道管網の凍結を防ぐことが可能になっているのである。

この作業は居住している一五戸にとっては不可欠な作業であるが、空き家を残している家にとっても必須な作業として認識されている。一軒でも水道管が凍結してしまうと、その下位の家には水が届かなくなり、居住している家に迷惑をかけることになるため、この作業が完了後には、空き家としている家の住人は水道の蛇口を冬季中、開放しておくようにするのである。こうした地域社会像が転出後も共有されていく機会として無尽は機能してきたのである。

（四）区民としての付き合い

四月の総人足に合わせて開催される総会は、居住者・転

写真8　総人足終了後の会食（茂倉公民館）

出者の区別も性差もなく、自由に発言ができる機会となっている。毎年の総会で確認・検討されているのは、茂倉集落の暮らしを維持するために具体的になすべきことと、現状での実現可能性である。そこで検討すべき原案は役員会で検討された案件であるが、その素案は区長が中心になって検討されていくことが多い。三巡目・四巡目の区長を経験している居住者は、どうすれば無理なく区の運営が可能になるか承知しており、何よりも茂倉で暮らしている女性たちの要望を斟酌して検討すべき素案が準備される。興味深い事例があったので紹介しておきたい。

この数年の間で話題にのぼった案件は、人足や祭礼の折に居住者の女性たちが担ってきた会食の準備をやめたいということに対する対応であった。人足等の後には、バーベキューが行われており、そこが人足行事の主な交流の場となっていたが、料理を作る女性の負担を理由に、二〇一七年一二月の総人足からこのバーベキューを休止することが決議されたが、当の女性たちが「せっかく来てくれるのに、何もしないわけにはいかない」ということになり、現在も作業後の会食は継続されている。高齢化がすすむ中で当日の食事の準備は前日から仕込が始められる。その準備をする区長夫人の負担は過

重であるが、作業をするためだけに帰ってくるのでは総人足が続かなくなってしまうのではないかという危惧について女性たちの間で検討されることになったのである。総会の場で、女性たちが続けてきた会食の準備が簡単なものではなかったことが確認される機会が得られたことで、居住者の女性だけでなく転出者の配偶者も加わって準備が続けられるようになったのである。

会食の場で、女性たちが男性たちに食事をすすめる時の言葉は、「バカ」「ノメ」「クエ」の三語が基本である。バカはオイの意で、せっかく来てくれたのだから茂倉で作ったものを食べていって欲しいという願意がこの三語に籠められている。会食の場が維持されることで、「バカ」「ノメ」「クエ」という言葉だけで了解しあえる同郷者が共有してきた幼馴染の関係が確認されているのである。普段会えない人と会い交流できるのは嬉しいという、若者を経験した長男たちとは異なる女性たちが共有している感覚である。長男たちが形成している年齢階梯的な集団に対して、女性たちはそれを評価し労う存在となることで、茂倉の協働作業は継続されているのである。

四、「あきらめない」という生き方

（一）総人足という試みが訓えてくれるもの

他地域に生活拠点を移している転出者は、総人足のほかに不参料が生じない草刈り人足などにもできる限り参加しているという。その理由として、月に三回は集落にある空き家の様子を見に行っており、「家に通うときにこの道を使わせてもらっているから」だという。生活拠点を他地域に移している人たちも、人足行事にはできる限り参加しているという。集落の家屋にあった位牌も他地域の生活拠点に移しているため、人足行事以外は、盆などの機会であっても、集落の空き家に泊まることもないという。それでもなお人足行事に参加する理由として、「自分と同じ代やその下の代がいつも頑張ってやってくれている。自分が抜けるわけにはいかない」、同世代の居

住者や転出者が人足行事に参加し続ける限り、やめるわけにはいかないという気持ちなのだという。また、空き家となった家屋を残して他地域で生活をしながら茂倉集落の人足行事に参加することは負担であったときもあったというが、「お互い重荷にならないように」という他の住民への配慮の気持ちから、自身が動けなくなるまでは、参加しようと考えているという転出者もいる。他地域に生活拠点を移した人たちは、居住者への配慮を人足行事参加の理由としている。なかには、「ここの空気を吸えるだけでよい」という心情を語る転出者もいる。

（二）総人足という試みの課題と可能性

それでも総人足に参加し続けることは容易なことではない。転出者世代は転出先での自治会活動にも参加しなければならないという事情を抱えている。転出先では複数世代で暮らしている家庭もあるが、転出先においても自治会等の活動の主体は当該世代が担うことになりがちなのだという。同居している後継者世代は、勤務との兼ね合いで、自治会等の活動にも参加できないという。現在、総人足に参画している転出者にはこうした事情も存在するのである。

こうした状況を居住者たちはどのように理解しているのであろうか。茂倉で暮らしている居住者の多くも、実は他地域にセカンドハウスを所有しているのである。換言すると、セカンドハウスのある地域での自治会活動等が後継者世代によって恒常的に対応できているから、茂倉を中心とした生活が続けられているのである。居住者たちは転出者が抱える状況を理解しながら、協働作業の継承を適えようとしているのである。

その具体的な試みとして歴代区長を中心にすすめられてきたのが、人足の日時を祭礼等の期日に合わせる試みである。春祭りと冬祭りの日程と各総人足との日程を調整することは恒常化してきており、転出者が茂倉との間を往来する機会を減らすことが考慮されている。また、こうした配慮により、年周期で空き家となっている家屋に宿泊しなくてもよいことになる。空き家となった家屋の維持のためには宿泊をともなう来訪の方が望ましいの

写真9　道祖神祭り

であるが、次世代が空き家となった家屋に関心がないため、当該世代にとっては空き家の存在は自分が通える間だけ残しておければよいという判断に推移しつつあるのである。こうした転出者たちの諦念ともいえる感覚を居住者たちも共有しているのである。転出者もまた、居住者の心遣いを理解しており、「ムラの人たちが良く考えてくれている」と感謝しているのである。

茂倉での協働作業はこうした思いあう気持ちの集積によって続けられているのである。二〇二〇年の道祖神祭りでは例年通りの厄払いの奉納に加えて、還暦や喜寿の祝いの奉納も行われた。こうした複数世代が集えるようにする試みも昨年度から始められたもので、人足並みの人数が参集することになった。

（三）最小努力としての「あきらめない」という生き方

茂倉の人たちの付き合いは、マキや名付けの慣行等により、地面の底からつながっているような関係である。ところが、高度経済成長期に転出が始まり、転出先での進路選択が行われ、通婚圏が拡大していくことで、茂倉で生まれ育った子どもたちはいなくなってしまった。そ

写真10　道祖神祭りの奉納物

のために、この経験を共有する機会のなかった転出者の子息世代は、茂倉という地域は父親や祖父母の家や墓がある場所でしかない。現在、総人足等の年周期の行事に参画している世代もこのことは充分に承知しており、「今の人たちで、今できることを精一杯やれればいい」としている。続けていくことで、自分たちが暮らしてきた（育った）茂倉という場所での暮らしを伝えられればよいと考えている。現在の茂倉に集う人たちに共通するのは、「あきらめない」という最小努力を続けようとする生き方であり、それを実現できているのは同じ場と時を共有してきたことで形成されてきた、それぞれが到達目標として設定できる地域社会像が描けているということである。

おわりに

茂倉に通って強く実感することの一つは、諸行事に集まる複数世代の人びとは、集う場所として茂倉をみているのではないかということである。集うことで、先祖とともに生きることと、同時代に茂倉で暮らした

人びとととともに生きることとを、茂倉の人びとは行っているのではないかと感じる。ともに暮らしてきたことで共有されてきた地域や家や人の記憶が、転出者となり転出先での自治を担う立場になっても、茂倉で暮らす人たちや茂倉で生きた人たちとともに生きることを強く意識しているのであろう。その背景には所与の自然環境のなかから資源となるものを見出し、それらが低利用の資源であったとしても、手間を惜しまず協働することで更新性資源として活用してきた経験が共有されていることが考えられる。茂倉地区におけるマンノウガンという評価の真義はこのことにある。

家業の継承は一戸のみで完結・継承されるものではなく、多くの他者の存在なしには成立しない。他者との協働、他者の協力や理解により、世襲的な家業を存続することができたのである。そして、家業を永続的なものにするためには、資源利用においても相互監視的な資源管理の方法が世襲されていくことになった。茂倉の総人足はこうした地域社会のあり方を伝えている。一方で、こうした自律的に行われてきた資源管理の論理が次世代には継承されることはなくなりつつあることも示している。他出先で生まれた子女たちには、両親（父親）の実家の維持にどの程度かかわれるは、今後の課題となっている。とくに、他出先で配偶者を得た子女たちには茂倉は遠い存在になりつつあるという現実も直視しなければならないが、前述の「今の人たちが、今できることを精一杯やればいい」という、現在、茂倉に集う人たちの「あきらめない」という生き方は、都市部を含めた地域社会の錯綜とした現状や課題に対して、確かな示唆を与えてくれている。

注

（1）早川町茂倉地区へは、早川町域調査の一環として断続的に訪ねていたが、二〇一四（平成二六）年の早川豪雪時での茂倉地区住民の対応を知り、その年から継続的な調査を始めることになった。個人的な調査経過をふまえて、平成二八年・二九年には成城大学文芸学部文化史実習の対象地として、文化史学科二年次の民俗調査実習を実施さ

せていただいた。

この実習を受講した学生たちのなかから、以下の卒業論文・修士論文が作成された。二〇一八年度文芸学部文化史学科卒業論文「先祖と生きる―中山間地域における世代をつなぐための戦略―」（尾又綾子）、二〇一八年度文学研究科日本常民文化専攻修士論文『居住者と他出者との協働―山梨県南巨摩郡早川町茂倉を事例に―』（鈴木彩子）、二〇一九年度文芸学部文化史学科卒業論文「居場所としての『空き家』―山梨県南巨摩郡早川町茂倉集落の事例をとおして―」（中川桜）。

（2）この時期には、山梨県下では地方病と呼ばれた日本住血吸虫症が完全には撲滅されておらず、甲府盆地内の水田には日本住血吸虫が中間宿主とするミヤイリガイが生息していたことから、水田の購入については慎重に検討されたという。

また、そのために水田の購入金額は低額におさえられることにもなったが、放置され荒地となった水田を整備するまでには多くの労力あ必要となり、シンルイマキでのユイシゴトにより整備が行われたという。

（3）早川町には中洲という集落が存在するが、ここでいう中州は早川の河岸段丘を指す。中州集落はこの端に立地している。早川中流域では最大規模の河岸段丘が広がっており、東京電力による新倉集落での水力発電事業の作業拠点となった。現在では、リニアモーターカー敷設のためのトンネル工事事業所等が中州に設営されている。

（4）平成二八年度の実習期間中に茂倉集落内で急病人が発生し救急車出動が要請されたが、茂倉に最も近い中洲詰所からの移動に三〇分以上を要し、病院までの搬送に三時間を要した。

（5）茂倉の人たちの間では、自分だけが良ければ良いという考え方はないのだという。困ったときは助け合うし、いい物が手に入ったらみんなで分け合う。こういう姿勢をモグラコンジョウと表現している。病人の具合が悪いときは、声を掛け合ってお寺でお籠りをすることなども日常的に行われている。

（6）恒常的な要員を必要とする三番叟は休止されたが、少人数でもできる雨乞いやお日和あげなどは続けられている。また、本文では言及しないが正月のヤナギマキという行事は男手が揃わなくなってきた折に、女性にも助力を求めるようになり、現在では住民総出の行事となっている。

（7）アンケートの質問項目は次のとおりである。（原文のまま表記するが、必要に応じて句読点のみを加えた）

・現在彼方の家が留守になって居りますが今後どのように考えているか、区を脱退したいと思っているか。

・脱退したいと答えた方に伺います。脱退しても家があるので区費は全額払うか。

・区の人足について年2回有りますが、全て行政に任せるか。春は総会が有るので仕方がないが、冬の人足は任せる（不参料廃止）意見。

・区の役員について、先ず区長について、貴方が又は子供が帰って来て受けられますか。

・次に区会議員及び氏子総代は受けられますか。

・テレビ組合に付いて伺います。全く見ていないので組合を脱退したい。

・水道関係に付いて、水道は本管よりより分配して各家庭に入っております。分配部分で如何なることが生じても個人負担となって居ります。（新設と当時の規約）です。

・秋葉さん参りに付いて、現在氏子総代が参って居りますが、年年困難を感じて居ります。続けるか送ってもらうか。

（8）『若者』の綴りに次の文章が記されている。

若者創立に就いて

従来氏子祭典の行事に関しては、青年団に祭典部を設け之を執行して参りましたが、今回青年団の運営方針を大改革する事に相成り、従って入退団は青年各位の各々の自主的観念に基づくと言ふ組織（ママ）に変更となり、さすれば祭典行事に非常な困難を伴う関係上、茲に茂倉青年団依り完全に別離となり、若者なるものを創立するに至った次第であります。

昭和二十五年三月四日　　頭

（9）妙蓮寺の立地している場所は、かつては倉本マキのオオヤの所有地であったこともあり、西方寺の檀家となっている倉本マキの人たちを含めて、妙蓮寺の水行にはほぼ全戸の住民が集う。

文献表

及川清秀『山のむらから―歴史と民俗の転換期―』近代文藝社、二〇〇七年

早川町誌編纂委員会編『早川町誌』早川町教育委員会、一九八〇年

参考文献

岡恵介『山棲みの生き方―木の実・焼畑・短角牛・ストック型社会』大河書房、二〇一六年

掛谷誠「小離島住民の生活の比較研究―トカラ列島、平島・悪石島」『掛谷誠著作集Ⅰ　人と自然の生態学』京都大学学術出版会、二〇一七年

小島孝夫編『山梨県南巨摩郡早川町新倉・茂倉の民俗（文化史実習Ⅱ　平成二八・二九年度成果報告書）』成城大学文芸学部文化史学科、二〇一八年

白水智『中近世山村の生業と社会』吉川弘文館、二〇一八年

付記

本稿は成城大学民俗学研究所研究プロジェクト「地域社会の変容に関する実証的研究―循環的ソーシャルキャピタルの構築にむけて―」（平成二九年度・平成三〇年度日本私立学校振興・共済事業団学術研究資金助成事業）の研究成果の一部である。

（成城大学文芸学部教授
成城大学民俗学研究所所員）